

令和 5 年 6 月 15 日現在

機関番号：14602

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2022

課題番号：17K17602

研究課題名(和文) 飢饉災害と古代銭貨の関連性分析

研究課題名(英文) Analysis of the relationship between famine disasters and ancient coins

研究代表者

村上 麻佑子 (Murakami, Mayuko)

奈良女子大学・人文科学系・准教授

研究者番号：70791565

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、日本と中国の古代国家が、飢饉や災害などの非常時において、貨幣政策を行っていたことをタイミングに注目して分析した。さらに、その意義を文献史料から探った結果、日本と中国のいずれの地域でも、貨幣発行は、非常時に混乱し大量死の危機に瀕する社会構造を立て直すための活路として、国家によって見出された政策であったことを結論付けた。貨幣には、災害や疫病、飢饉といった非常時の社会的ダメージを復旧する機能があり、すでに古代の統治者はそれを理解し運用していた。こうした貨幣の持つ「人間社会を維持し制御する力」に注目し、非常時における貨幣のあり方を見極めることは、貨幣の可能性を探る上で重要な意義を持つ。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義としては、これまで注目されてこなかった気候変動、災害、疫病、飢饉といった非常時に目を向けて、貨幣の流通、および統制政策が如何に行われていたか検討した点にある。先行研究においては、貨幣は政治史、社会史、経済史の中で平時のものとして扱われ、商品経済を回すための交換手段としての役割を中心に論じられてきた。しかしながら、非常時に意図的な流通が行われていたことを指摘したことで、大量死の危機に瀕する社会状況において、古代国家は復旧インフラの役割を、貨幣に見出していたという新たな視角を得ることができた。

研究成果の概要(英文)：In this study, I analyzed the timing of the monetary policies of the ancient nations of Japan and China in times of emergency such as famine and disaster. Furthermore, as a result of searching for its significance from historical documents, it was found that in both Japan and China, the issuance of money was found by the state as a means of restructuring social structures that were in turmoil in times of emergency and were on the verge of mass death. concluded that it was policy. Money has the function of restoring social damage in emergencies such as disasters, epidemics, and famines, and ancient rulers already understood and used it. Focusing on the "power to maintain and control human society" that money has, it is of great significance in exploring the possibilities of money to determine how money should be in times of emergency.

研究分野：日本古代史

キーワード：貨幣史 災害史 古代史 日本史

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 従来古代史では、経済が未発達であったため錢貨流通は社会にほとんど影響を与えず、錢貨の発行理由は 国家の実物貢納経済の保管目的 や 都造営における国家的支払い手段・鑄造差益を得るための国家財源の自己創出 にあったとする定説が存在した。しかしながら、日本の古代国家も世界の他地域と同様に、民衆、特に自ら農業生産を行わない都市民の消費生活を支えるために貨幣を利用し、流通経済を統制していた可能性がある。

(2) 総合地球環境学研究所の中塚武氏らの研究プロジェクト「高分解能古気候学と歴史・考古学の連携による気候変動に強い社会システムの探索」により、樹木年輪の酸素同位対比を用いることで、日本列島の紀元前 65 年から現在までの、年ごとの湿度が復原されている。この湿度データを六国史の記述に照らし合わせると、錢貨発行や流通に関わる政策を施した年、もしくはそれ以前の近接する年には、日本列島で異常な乾燥が起こっている場合が多い。このことから旱魃や災害、米の不作といった危機的状況のなかで、錢貨発行がなされていた可能性に気付かされた。しかしながら、古代史において環境や災害史の研究は立ち遅れた現状にあり、まして旱魃による飢饉災害と錢貨政策の関係性について考察した研究は、管見の限り見出せなかった。

## 2. 研究の目的

(1) 本研究では、湿度データと六国史の記述の整合性を照らし合わせつつ、飢饉災害と錢貨政策に関連があるという仮説の妥当性を明らかにし、どのように両者が関係するのか、その具体的な動きと全体像を解明することを目指す。

(2) 日本が模範とした中国の貨幣政策についても、歴代正史の「食貨志」などを用いて飢饉との関係性があるかどうかを分析し、東アジアにおける古代錢貨の特徴を明らかにする。その結果として世界史レベルでの鑄造貨幣の流通との共通性や相違点について問題提起できる広がりを持った研究を目指す。

## 3. 研究の方法

(1) すでに『日本書紀』以下六国史の内容はエクセルデータ化され、中塚武氏らが作成した湿度データも得ているので、それを利用して湿度データと飢饉災害記事、錢貨政策関連記事との対応表を 887 年分まで作成する。

(2) 対応表を用いて、湿度データと飢饉災害記事の適合性を調査し、それと並行して飢饉災害記事と錢貨政策の関連性について分析結果を出す。湿度データの史実との適合性を把握した上で、あらためて湿度データと錢貨政策記事についても対応関係の有無を確認し、史書に記された現象の具体的内容を読み解くとともに、史実には表されていないが災害や飢饉が発生した可能性が高く、錢貨政策とも関連する現象についても存在を確認し妥当性を探る。

(3) 中国史でも飢饉災害と錢貨政策との関連については議論が見られない。そこで『漢書』から『明史』といった歴代正史に編纂された食貨志を中心に、両者の間に対応関係があるかどうかを分析する。また中国における気候変動データも資料収集を行い、日本の場合と同様、適合性および関連性について考察し、錢貨政策の日本との共通性とそれぞれの独自性の比較検討を試みる。

## 4. 研究成果

(1) 日本の古代国家が行った錢貨発行が、気候変動による災害や疫病、飢饉といった非常時と関わって展開していた可能性について検討を行った。特に六国史を中心に、比較的史料の多い和同開珎、万年通宝、神宮開宝、隆平永宝、富寿神宝、承和昌宝、長年大宝、饒益神宝、貞観永宝という九種類の錢貨について分析した。それぞれがどういった気候変動の中で錢貨発行に至り、またその後どのように展開していくかを理解するため、発行の年の 10 年前から、発行後 5 年間も含めてグラフを作成し、災害記事の多寡、湿度データや気温データをグラフに入れた。

その検討結果として、錢貨発行は災害による危機的状況に直面した際、とくに京畿内の都市部で、労働力を糧に生活する民衆を重点的に保護する目的からなされたものであることがみえてきた。錢貨発行は基本的に、政府による穀物の備蓄と供給が不足する場合の代替案としてあり、また鑄造は中断されることも多いことから、政府にとって負担の大きい事業であったともみられる。にもかかわらず、非常時においても現状の社会構造を維持するため、やむをえず錢貨を発行、通用させていたととらえることができる。

こうした錢貨発行のあり方からすると、古代における錢貨流通は、古代の商品経済の発達度合いとは関係なく展開したものであるといえる。従来、日本の古代錢貨が京畿内を中心に流通したことは、経済が未発達ななかで、国家が強制的に流通させた予期せざる結果として評価されるこ

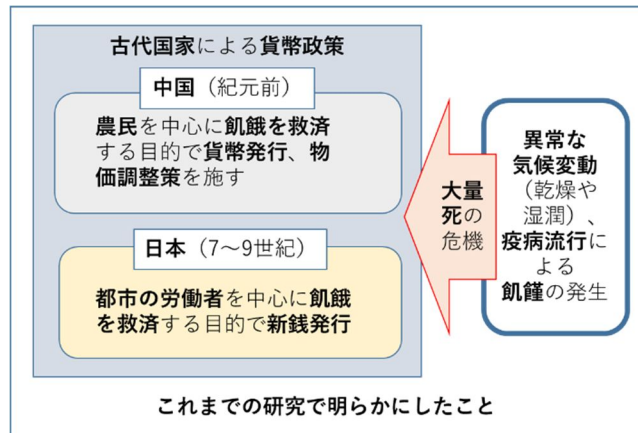
とが多かった。しかし災害や疫病、飢饉に際し、政府は都城を維持する労働者を保護する目的で、意図的に銭貨を活用したと評価することができ、また、銭貨が京畿内を中心に展開したことは、政府にとって、もともと想定範囲内であったとみられる。

(2)中国の場合、統治者による貨幣鑄造がおこなわれたのは、『国語』や『管子』等を確認すると、災害による飢饉の発生がきっかけであった。前漢期の悲惨な飢饉時においても、銭貨の発行がなされており、穀物価格の高騰と銭貨の価値の下落が深刻化するなかで、利益を独占する商人を破産させる目的が、銭貨発行政策に期待されていた。

したがって、中国でも日本と同様に飢饉、災害といった非常時に、銭貨を含めた貨幣政策を行うことが指摘できた。

ただし中国の銭貨は、飢饉発生を抑制することを目的に、豊作と凶作の両方のタイミングで、生産者である農民と、消費者である商工業者や都市民のあいだでの、価格調整手段として展開するのを理想としていた。これに対して日本では、もっぱら飢饉発生時の都市民の救済措置として機能した点に相違がある。

つまり、古代日本において、銭貨は穀物と交換できる貨幣媒体という性質は中国由来の物として保持しながらも、中国で重視された農民保護の目的を見いだされていなかった。その代わりに、平城京、平安京などの都市空間で、政府の直接的な保護を必要とした人々、都城の造営やその経営維持のための労働者に対して、重点的に銭貨政策を施していたと考えられる。



(3) 古代国家によって展開した貨幣政策の意義について、論理化を行った。

まずその前提として、人のアプリオリな性質から考察を始めた。人は、装飾品を用い始めて以来、おのずから分業を形成するという性質を同時に持つこととなっている。この人間の分業を維持するうえで、最適の食料であったのが穀物であり、人は穀物を生産することを通して、大量の食糧を備蓄、移動することを実現し、結果として定住可能な分業社会、農村と都市の成立が導かれたとみられる。

しかし、食料を自給しないで定住することは、災害や非常時に陥った場合、不作で穀物の供給が立たれると飢饉につながり、大量死を生む。穀物に依存した分業社会の形成は、飢饉による大量死の危険と、常に隣り合わせであったと考えられる。

そこで、大量死がいつ発生するともれない分業社会を、安定的に維持するために、生来人が嫌がる農業を管理し、穀物を補填する装置として生み出されたのが、中央集権的権力を持った、国家である。国家は、隷属する人々(奴隷)に強制的に穀物生産を担わせることによって、必要最低限の食料を確保することを実現した。この国家の抱えた分業社会を維持するという宿命から、古代中国においても、国家は農業政策や貨幣政策を、災害、飢饉、疫病といった非常時の救済手段として行っていたことが、史料から確認される。

しかも古代中国の政策施行のタイミングをみると、それは農業政策から貨幣政策へと、従来の不十分な救済措置を補う形で展開していることがわかる。そして、戦国秦、前漢に至って、国内において生産、備蓄された穀物を、農民との間でやり取りするために、農民が使用できる貨幣として、銭貨が成立することとなった。

古代日本の場合も、銭貨政策は飢饉災害のタイミングでなされていることが認められ、中国と同様に、国家は分業社会を維持するという目的の下に存在していたことがわかる。それゆえに、古代国家にとって、貨幣とは、分業社会を維持するため、民衆救済のタイミングで発行される復旧インフラの役割を担うものであったと捉えることができる。これは、従来、主に「交換の手段」や「国家的支払い手段」として把捉されることの多かった国家的貨幣の役割に、新たな視角をもたらすものであるといえる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

|                                       |                      |
|---------------------------------------|----------------------|
| 1. 著者名<br>村上麻佑子                       | 4. 巻<br>17           |
| 2. 論文標題<br>先史日本における貨幣の展開              | 5. 発行年<br>2018年      |
| 3. 雑誌名<br>年報日本思想史                     | 6. 最初と最後の頁<br>1 - 14 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし         | 査読の有無<br>有           |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>-            |

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

|  |
|--|
| 1. 発表者名<br>村上麻佑子                               |
| 2. 発表標題<br>古代における気候変動と銭貨流通の関連性分析               |
| 3. 学会等名<br>地球研・気候適応史プロジェクト2017年第3回先史・古代史グループ会議 |
| 4. 発表年<br>2018年                                |

〔図書〕 計2件

|   |                 |
|---|-----------------|
| 1. 著者名<br>小路田泰直 編著(執筆分担者；村上麻佑子)                 | 4. 発行年<br>2020年 |
| 2. 出版社<br>敬文舎                                   | 5. 総ページ数<br>357 |
| 3. 書名<br>『疫病と日本史－「コロナ禍」のなかから』（「飢餓・疫病と農業・貨幣の誕生」） |                 |

|   |                 |
|---|-----------------|
| 1. 著者名<br>西谷地晴美・西村さとみ・田中希生 編(執筆分担者；村上麻佑子) | 4. 発行年<br>2021年 |
| 2. 出版社<br>敬文舎                             | 5. 総ページ数<br>325 |
| 3. 書名<br>『歴史学の感性』（「古代日本の気候変動と銭貨発行の関係分析」）  |                 |

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

|  | 氏名<br>(ローマ字氏名)<br>(研究者番号) | 所属研究機関・部局・職<br>(機関番号) | 備考 |
|--|---------------------------|-----------------------|----|
|--|---------------------------|-----------------------|----|

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
|---------|---------|